

報告課題⑦ 第2回テストに向けて（復習プリント）

●表面

空をかついで…この表現そのものが「比喻」であることに注意。実際に空をかつぐことなど、不可能であるのに、とつともなく大きなものを世代を超えて継承していくことのたとえ。

一、この答えを境として、前半がきのうからきょう、後半がきょうからあした、と続いていく時間が変わっている。

生物がいるとされる一番遠い距離

ここに点「、」があることに注意。

二十億光年の孤独…誤字に注意！

孤

二、「ネリリし、キルルし、ハララしている」とあることから、それぞれのカタカナ語は「動詞」であることに注意すること。

第一連…人類は小さな球（地球を例えている。直径1万2700km）の上で

第二連…火星人は小さな球（火星を例えている。直径6000km）の上で

「連」とは、詩歌における、内容の小さなまとまり。普通、一つのまとまりあと、一行空きの改行が見られる。（問い この詩は何連？）

※この表現から、作者は宇宙からそれぞれ二つの惑星を上から見下ろし、小さく見えるほど遠いところにいる感覚で書かれていることがわかる。

※宇宙の端から端までは137億光年と言われている。

第二連 しかしときどき地球に仲間を欲しがったりする  
それはまったくたしかなことだ

※第一連で地球の人類も孤独を感じているのだから、火星人も同じように感じて当然だという確信で書かれている表現に見受けられる。

第三連 万有引力…ニュートンの発見として有名。「万」は漢文で学んだ「百獣」のときの「百」と同じで、「すべての」という意味。（すべてのものが保有する引力という力、という意味。）

第五連 宇宙はどんどん膨ふくらんでゆく 誤字に注意！ 画数が多いのでしっかり確認を。

※普通、送り仮名は「膨ふくらんで」なので注意する。

※光速は一秒で地球を一周半する。（時速では30万km）

第六連 くしゃみ…宇宙空間（真空）では音が出ても伝わらない。宇宙の広大さとの対比でちっぽけな音を表現した。

作者…谷川俊太郎。小学生時代（二年生）に「スイミー」（ちいさなかしこいさかなのはなし）という、魚が主人公のアメリカの絵本（レオ・レオニ作）を学んだはずだが、この話を翻訳したのは谷川氏である。

※鑑賞とは…鑑賞文は作者がその文章（もしくは詩、俳句）を書いたときにどういう思いで書いたかや、その文にどんな背景があるか、何を言いたいのか（表現しているか）、などを述べる文である。感想文とは異なる。学習書P 52の「理解を深めるために」が「参考書としての鑑賞文」にあたるが、自分で作品の背景や、当時の作者の思いを想像しながら書いてみることに。

●裏面

冬が来た

三、口語動詞の命令形 五段動詞（e）、下一段動詞（eよ、eろ）、カ変動詞（こい）、上一段動詞（iよ、iろ）、

サ変動詞（しろ、せよ）

四、助詞の「も」：他のことがらと同様にこのことがらが成立する（並立・付加）を表す。

七、作者 高村光太郎の経歴に関する文章が課題となっているが、テストの時には、石垣りんや谷川俊太郎の経歴や、教科書に本文が載っていない（書名のみ）作品についても問われる可能性があるので、教科書P 74や学習書「理解を深めるために」も併せて読んでおくこと。

### 〔 詩歌に多用される表現技法 〕（例文）

体言止め：子どもがあこがれる野球選手。

倒置法：火事だ！ 山の向こうが。

省略法：赤い色が好きだ。しかし、青い色はちょっと…。

繰り返し（反復法）：働けど、働けど、わが暮らし 楽にならざり

直喩：まるで羊のような雲が浮かんでいる。

隠喩：雲一つないある朝、空から死が降ってきた。

擬人法：火山を始めとして、自然物のすべてが怒り狂っている。

対句法：壁に耳あり、障子に目あり。

### 〔 付録 〕 高村光太郎「道程」添削前・全文

どこかに通じてゐる大道を僕は歩いてゐるのぢやない

僕の前に道はない

僕の後ろに道は出来る

道は僕のふみしだいて来た足あとただ

だから

道の最端にいつでも僕は立つてゐる

何といふ曲りくねり

迷ひまよつた道だらう

自堕落に消え滅びかけたあの道

絶望に閉ぢ込められかけたあの道

幼い苦悩にもみつぶれたあの道

ふり返つてみると

自分の道は戦慄に値ひする

四離滅裂な

又むざんな此の光景を見て

誰がこれを

生命（いのち）の道と信ずるだらう

それなのに

やっぱり此が生命（いのち）に導く道だつた

そして僕は此処まで来てしまつた

此のさんたんたる自分の道を見て

僕は自然の広大ないくしみに涙を流すのだ

あのやくざに見えた道の中から

生命（いのち）の意味をはつきり見せてくれたのは自然だ

これこそ厳格な父の愛だ

子供になり切つたありがたさを僕はしみじみと思つた

たうとう自分をつかまへたのだ

恰度そのとき事態は一変した

俄かに眼前にあるものは光を放出し  
空も地面も沸く様に動き出した  
そのまに

自然は微笑をのこして僕の手から  
永遠の地平線へ姿をかくした

そしてその気魄が宇宙に充ちみちた  
驚いてゐる僕の魂は

いきなり「歩け」といふ声につらぬかれた

僕は武者ぶるひをした

僕は子供の使命を全身に感じた

子供の使命！

僕の肩は重くなつた

そして僕はもうたよる手が無くなつた

無意識にたよっていた手が無くなつた

ただ此の宇宙に充ちみちてゐる父を信じて

自分の全身をなげうつのだ

僕ははじめ一步も歩けない事を経験した

かなり長い間

冷たい油の汗を流しながら

一つところにたちつくして居た

僕は心を集めて父の胸にふれた

すると

僕の足はひとりでに動き出した

不思議に僕は或る自憑の境を得た

僕はどう行かうとも思はない

どの道をとらうとも思はない

僕の前には広漠とした岩畳な一面の風景がひろがつてゐる

その間に花が咲き水が流れてゐる

石があり絶壁がある

それがみないきいきとしてゐる

僕はただあの不思議な自憑の督促のままに歩いてゆく

しかし四方は気味の悪い程静かだ

恐ろしい世界の果へ行つてしまふのかと思ふ時もある

寂しさはつんぼのように苦しいものだ

僕はその時又父にいのる

父はその風景の間に僅かながら勇ましく同じ方へ歩いてゆく人間を僕に見せてくれる

同属を喜ぶ人間の性に僕はふるへ立つ

声をあげて祝福を伝へる

そしてあの永遠の地平線を前にして胸のすく程深い呼吸をするのだ

僕の眼が開けるに従つて

四方の風景は其の部分明らかに僕に示す

生育のいい草の陰に小さい人間のうちやうぢや這ひまはつて居るのもみえる

彼等も僕も

大きな人類といふものの一部分だ

しかし人類は無駄なものを棄て腐らしても惜しまない

人間は鮭の卵だ

千万人の中で百人も残れば

人類は永久に絶えやしない

棄て腐らすのを見越して

自然は人類の為め人間を沢山つくるのだ

腐るものは腐れ

自然に背いたものはみな腐る

僕は今のところ彼等にかまつてゐられない

もつと此の風景に養はれ育まれて

自分を自分らしく伸ばさねばならぬ

子供は父のいつくしみに報いたい気を燃やしてゐるのだ

ああ

人類の道程は遠い

そして其の大道はない

自然の子供等が全身の力で拓いて行かねばならないのだ

歩け、歩け

どんなものが出て来ても乗り越して歩け

この光り輝く風景の中に踏み込んでゆけ

僕の前に道はない

僕の後ろに道は出来る

ああ、父よ

僕を一人立ちにさせた父よ

僕から目を離さないで守ることをせよ

常に父の気魄を僕に充たせよ

この遠い道程のため